

日誌 福建省南安の目連戯

野村伸一

日誌

2002年10月22日から28日まで、福建省南安市四黄村の草亭寺で一週間、目連戯を見学した。南安は泉州市の西隣、20キロ余り、鄭成功の故地として名高い。四黄村は南安市内から車で20分ほどの所に位置する。人口およそ三千人。草亭寺は観音を本尊とする寺で、現在、尼姑がひとり住んでいる。日常的にも女性の信徒が多いとのことであるが、今回のような大きな行事は男性の管理委員会が取り仕切る。草亭寺ではこの数年間に本堂の改築を三度おこなったが、今年はそれを記念して60年ぶりに大規模な目連戯を催した。近年、四黄村は工場の経営などで経済状況が好転し、村民の寄付がかなり集まるようになったことが開催の背景にある^{*1}。

一週間の木偶による目連戯上演の中心者は泉州劇団の副団長を務めた林文栄氏であり、その台本および脚色^{*2}も泉州に伝来したものといってよい。それは次のような構成で演じられた。以下では目連戯を中心に記すが、その他の行事についても簡単に触れた。

10月22日(旧暦9月17日)

今日と明日は木偶戯「李世民游地府」(目連戯の第一部)。泉州地方では大規模な目連戯は、この演目からはじめ、「三蔵取経」「目連戯」とつづく。木偶戯班は「晋江市陽春提綫木偶劇団」で団長は呉偉慶氏。演戯の中心になったのは元泉州劇団員の林文栄氏。その話によると、費用のかさむ一週間規模の目連戯は非常に数が少ないとのこと。台本は『泉州伝統戯曲叢書』第十巻、中国戯劇出版社、1999年所収のものによる^{*3}。ただし、実際の演戯では台本にない台詞も当然多い。

この日の傀儡戯は午前11時少し前にはじまった。まず相公爺(田公元帥)による舞台浄

*1 ちなみに、今回の予算は数万元とのこと。また行事の中心となる「拝千仏(25日の早朝、天公を拝礼すること)」では、各戸あたり、戸主は50元、その他の者はひとり10元の寄付をすることにしていた。

*2 いうまでもないが、実際の演戯では台本にない部分をふんだんに追加する。

*3 同書の「目連救母」には清代抄本と楊度抄本の2種類の台本が収録されているが、今回使用したのは楊度抄本である。これは楊度が1988-89年に完成した台本で、泉州木偶劇団が所蔵していた。楊度は清代末期の台本によってまとめたものとおもわれる(同書286頁)。

め(掃台)があり、つづいて、慶祝劇が簡単に演じられる。これらは 15 分ほどで終わり、すぐに「李世民游地府」の第一齣(幕)「慶升平」がはじまる。唐の皇帝李世民が天下太平を宣言し、魏徵、敬徳が聖君をほめあげる。

第二齣「化金簪」では子もなく出世もできない劉全と妻の何翠連が現れる。そして、夫が外出した時に僧(迦菩提祖師)がきて、喜捨を乞われる。金がなくて金簪を施した。一方、外で僧に出会った劉全は施しを求められるが、これを断る。だが、その時、翠連の金簪をみつけて、劉全は僧と翠連の関係を疑う。そして詰られた翠連は縊死を遂げる。やがて、それが仏供養のためだったという真実を知り、劉全は深い自責の念にとらわれる。

貧しい家庭の妻が夫の無事を祈って過分の施しをするものの、それがもとで波乱が生じるといふ発端の設定は近世の民衆生活の様相として十分に迫真感がある。以下、漁師と樵の対話、袁天? による魚の捕獲(「漁樵会」、それを知った竜王が術較べを挑むこと(「亀相奏」、城隍が玉帝の許可を得て竜王に雨を降らせるようにすること(「城隍奏)」がある。一方、それを知らぬ竜王は袁天? と約束をして万一、降雨があつたら首を差し出すことを約束する(「栽菜)。そこへ玉帝の降雨の命令がもたらされる。せっぱつまって亀相は降雨の時刻を書き改めることを竜王にいう。竜王はそれに従う(「議計)。しかし、これを知った雷公、電母たちは雨を降らせる(「降雨)。術較べに負けた竜王が袁天? に命乞いをする、徳行のある李世民のところへいくようにといわれる(「焼卦書)。しかし、玉帝の命令に従う魏徵は竜王を斬首する(「斬竜王)。竜王は李世民の夢中に現れ、約束を違えたことを嘆く(「竜王嘆)。そして、李世民の苦悩とその死(「囑国事)。

このあたり、滑稽感をもたせながらも人びとの苦悩と死がたくみに演じられる。李世民と部下が冥界へいき十殿の主判と出会う(「陰司界)。そして十殿の閻羅王が登場して裁判をする(「入公館)。李世民の寿命が三十五とあるのを五十五に改める(「改簿)。次いで、冥府の審判がくだされる。李世民の延命が命じられる。しかし、李世民は千金をもって竜王の恨みを解いてやらなければならない(「会審)。

22 日には以上第 16 齣まで、夜 10 時過ぎ終了。皇帝などといっても庶民と同じように苦悶し、冥府においては裁かれる。人ならぬ竜王の怨恨を解くべしという裁きはまさに天の声であった。こうした演劇を民衆は何百年も経験している。そのことは重要だ。

10月23日(旧暦9月18日)

午前中、村の代表者が朝早く観音の仏像を迎えに車で泉州の接官亭までいく。観音は旧暦9月15日から17日まで浙江省普陀山に置かれ、昨日、接官亭まで戻っていた。これを今日迎えてきて、19日の観音誕生日の儀礼に備える。村の人びとも行列を作って泉州と南安との境界点にある寨仔村まで迎えに出る。このように、観音を普陀山に持っていき、その験力を更新させるのは1985年からのことである。二、三年に一度の割でおこなって

いるという。前は 1999 年。

午前 11 時、「李世民游地府」のつづき。第 17 齣「游地府」。李世民が部下とともに地獄を巡る。そこで、世民はみずから殺した兄と弟に会う。このとき世民は世に戻って水陸道場をすることを条件にその場を離れるのは注目される。明清代の最も一般的な解冤の法事だったのである。

このあと、世民は意識を回復し、陰界での 3 万両の借金を返そうとする(「回陽」「還庫銀」。一方、亡妻に会いたいとおもいつめた劉全は世民の代わりに瓜を冥府に届けることを申し出る(「劉全嘆」「拆皇榜」。劉全は城隍廟にて許可を得(「城隍廟」、鬼とともに冥府へいき、妻の翠連に会う。冥府の崔判から、世民の妹と魂魄を取り替えれば回陽できることを教えられる(「凡皂引」。はたして、世民の妹は鞦韆から落ちて死ぬ(「打鞦韆」。世民は妹が一度死んでから蘇生したものの劉全のことを口にしてしていると聞く。劉全は世民にこの間の事情を告げ、翠連の魂魄のはいった李玉英と結ばれ、出世して団圓する(「大結局」)。

午後 9 時半ごろ、全 25 齣完。つづけて木偶戯「三蔵取経」を演じる。

10 月 24 日(旧暦 9 月 19 日)

観音の誕生日。午前中、草亭寺で普度がおこなわれる。大勢の女性たちが供物を携えてきて観音に祈りを捧げる。

傀儡戯「三蔵取経」は午前 10 時ごろはじまり、午後 4 時に終了。

夕食後、木偶戯「目連戯」はじまる。元来は 3 日「西遊記」、4 日「目連戯」と決まっていたというが、時間の関係でこの日のうちに、全 74 齣のうち第 7 齣「接玉旨」までをやった。以下、簡略にその名称と内容を記していく。

1. 賀元旦 傅相、劉世真、羅ト登場。香案を前にして長々と天地に拝礼し新春を言祝ぐ。
2. 尼姑化縁 尼がきて修行を勧める。聞く耳のある女人劉世真。施しをして帰らせる。
3. 会縁橋 乞食の呉小四、何有声、老婆など登場。傅相、会縁橋で貧窮の人びとに施し。
4. 神司会 土地公、竈神が傅相とその子羅トを賞賛する。
5. 三官奏 三官大帝が傅相の斎僧布施を玉帝に奏上。玉帝は傅相の墮地獄を免れさせる。
6. 霊官 玉帝の意を受けて王霊官が閻羅天子のところへいく。
7. 接玉旨 閻羅天子、玉帝の命令に接する。

10 月 25 日(旧暦 9 月 20 日)

朝、6 時少し前から若い菜姑(在家の尼)により「拜天」の儀礼。信徒 35 人ほど(大半が女性)が居並ぶ。天公、観音、諸天をまつる。これは道教の拜天儀礼を真似たものだろう。

信徒が徐々に増えて70名ほどになる。のちに前庭に出て道場を巡る。7時20分終了。
菜姑らはつづけて観音に向かい、宝懺を読む(「拜千仏」)。

午後「目連戯」つづく。第22齣「勸開葷」、すなわち劉賈が姉に肉食を勧めるところまで。

- 8.焼夜香 傳相、五十を過ぎて死(昇天)を予感する。食菜念経、斎僧布施をいとおく。
- 9.領文引 城隍は傳相に対して功德の浩大なることを告げる。
- 10.請昇天 金童、玉女に伴われ傳相が昇天。途中、望郷台、滑油山、奈何橋がみえる。
- 11.奈何橋 奈何橋で牛頭將軍に遮られるが、王靈官が玉旨を告げたことで傳相は昇天。
- 12.請和尚 波利寺の僧法本が現れる。そこへ益利がきて、亡き傳相の超度を依頼する。
- 13.出籠 波利寺の小僧や長老僧度月が現れて、傳相の超度のためにきたことを告げる。
(ここで夕食休憩。)
- 14.請神 羅卜の催す中元の超度儀礼。傳相の冥府への道行。僧度月の普度(瑜伽?口)。
- 15.朝霊 僧度月が弔問の人びとに説教する。
- 16.放赦 仏童が錫杖を手に取り「打城」をする。
- 17.坐座 僧度月による超度のつづき。最後に一切の鬼神のために餅を撒く。
- 18.請庫官 超度のつづき。劉世真と羅卜が傳相の霊のために紙銭を上げる。(省略)
- 19.吊紙(勸姐開葷) 劉世真の弟劉賈が弔問にくる。仏道を疑い姉に肉食を勧める。
(劉世真は弟を前に、精進生活の苦しさを訴える。劉賈はそれに応じて古来、聖人たちも肉食をしたとあって、仏道を退ける。これは在来の生活を勧めているにすぎない。)
- 20.母子別 羅卜は母に仏道を持し僧に施しをすることをいい置いて他郷に商いにいく。
- 21.許豹毆父 学び損ねた息子許豹が勤勉な父親許通に親不孝のことばを連ね殴る。
- 22.勸開葷 金奴、劉世真に肉食を勧める。世真は「夢から覚めたようだ」という。

10月26日(旧暦9月21日)

午後から「目連戯」つづく。第23齣「二悪計議」から第42齣「掠魂」、母親劉世真が帰郷した羅卜に嘘をついて魂を取られるところまで。

- 23.二悪計議 張揚、秦福が道士に扮し募縁と称して羅卜から金を奪うことを謀議する。
- 24.騙銀贈銀 悪党二人が羅卜から金を騙し取る。羅卜、困窮の許通に会い金をやる。
- 25.雷電風雨 雷公、電母、風伯、雨師が劉世真の侍女金奴と悪党二人の処罰を論議。
- 26.逼父行乞 許豹は読書し、父親には仕事にいかせる。父親の持ち帰った2両を奪う。
- 27.悪人受懲 張揚、秦福、許豹が雷に合って死ぬ。
- 28.審三人 死んだ三人が冥府の獄吏、官吏にみずからの悪行を白状する。
- 29.換貨 寒山、拾得が商人になり、羅卜に大きな利益を得させる。羅卜、帰路へ。
- 30.開葷 劉賈は姉の誕生日にやってきて、肉食をさせる。李徳厚の諫めもきかない。

- 31.宰狗齋僧 肥和尚が劉世真と金奴の肉食を語る。金奴は狗肉入りの饅頭を僧に施す。
(ここで夕食休憩。)
- 32.坐寨 山に要塞を作った李純元とその仲間頼皮豹。
- 33.送別 羅トと益利は帰郷の道にある。そこへ頼皮豹がやってきて二人を捕らえる。
- 34.普陀境 李純元の居所が観音の力で普陀境となる。観音は羅トに母の破戒を説く。
- 35.三步一拝 羅ト、母の滅罪消災のために三步一拝。李徳厚による報告。母子再会。
- 36.神明差遣 土地公が現れ、花園の骨を露出させ、劉世真の嘘を暴くことを述べる。
- 37.搬徙骨骸 劉世真と金奴の隠蔽工作。
- 38.查簿遣鬼 閻君の命令で、部下たちが劉世真を捕らえることにする。
- 39.打益利 劉世真は肉食を否定して益利の忘恩を詰る。同時に天に誓って潔白を主張。
- 40.会鬼捉犯 無常鬼、青面鬼、解差などが劉世真を捉えに家にやってくる。
- 41.花園呪誓 世真が羅トを伴い花園に行く。地から骨が現れるが、母は呪誓して失神。
(劉世真の呪誓は空しいが、七孔流血、一八地獄を予告するかのようで緊迫感がある。)
- 42.掠魂 劉世真は青面鬼に引きずられて冥府にいき、傅相に出会う。
(ここまで全体が台本に忠実。演戯は写實的。非常に明快だが、やや余韻に欠ける。)

10月27日(旧曆9月22日)

午後から「目連戯」つづく。全74齣のうち、第57齣「審五人」まで。劉世真の地獄遍歴が際立つ。そのほかにも、さまざまな人物が現れて地獄の裁きを受ける。

この台本では、? 田におけるような三殿超度と現実の人びとの超度の重ね合わせはない。演出はかなり洗練されていて劇場の公演にも十分、耐える水準である。

- 43.還魂 劉世真、一時気を取り戻すが、再び鬼神に苛まれ、死んでいく。羅トの驚き。
- 44.竈媽引 世真の魂は帰家するも門丞、鍾馗に遮られる。だが竈の女神が手引きする。
- 45.托夢 世真が羅トの夢に現れ地獄行を告げ、超度を託す。羅ト、出家の覚悟をする。
- 46.上望郷台 世真は望郷台にきて、羅トに向け、かつて齋僧布施をしたことを告げる。
- 47.速報審 劉世真が冥府で牛頭、馬面、青面鬼、速報司により裁かれる。墮獄に決定。
- 48.過滑油山 かつて傅相と羅トに施しを受けた青鬼は劉世真を背負って油山に行く。
- 49.四海賀寿 9月19日の観音媽の誕生日に四海竜王や亀相、護法、善才らがきて祝う。
(観音菩薩の誕生日の祝いという場面は泉州の台本に特有のものという。このなかで観音がもと妙善という王女であったが、結婚を願わず香山寺にはいり修行し、のち南海の普陀山で成仏したこと、善才、良女には一層仏道に励むべきこと、父母による養育の恩の重いことが観音の口から語られる。庶民教化の面もある。)
- 50.守墓招朋 雷有声らが羅トを賊の仲間にしようと刀で脅すが、羅トは動じない。

51.却柴 観音と勢至が女人として金剛山にいき、雷有声らを法華経で教化する。

(この辺りはさながら観音菩薩のための物語だ。ここで夕食休憩。)

52.造土獅土像 観音、勢至は山賊に読経し土の獅子と象を飛ばせたら結婚するという。

53.収捕駁仏 護法、官兵が山賊を追う。山賊らは観音の力で改心。羅ト、救母の願い。

54.捉金奴、過孤栖径、捉劉賈 金奴の死。世真、金奴の地獄での苦悩。劉賈の捕捉。

(台本が長い。1時間40分余り。二人の女性の冥府での苦しみを詳述する。世真は生前に乞食に施しをしたことがあり、冥府で彼らに救われることなど、応報の演戲もあつたりする。総じて演出の力点が置かれているのはわかるが、さすがに少し冗長な感がある。)

55.辞親、辞官 羅トの許嫁の父親曹献忠が羅トの出家を受けいれ婚約解消し官を辞す。

56.辞三官 羅トは救母修行に行くにあたって、三官大帝の像に加護を祈念する。

57.審五人 世真、金奴、劉賈などの悪人、また善人が刀山、劍樹の地獄で裁かれる。

(地獄の描写が詳しいが、第何殿のものか不分明。演出としてはくり返しが目立つ。)

10月28日(旧暦9月23日)

「目連戯」の4日目、最終日。? 田の目連戯に較べると、第62齣「観音試羅ト」、第73齣「観音雪獄」など、美しくも頼もしい女性としての観音(観音媽)の活躍が際だつ。また第60齣「試雷有声」などは第62齣の伏線であると同時に、若い女が愚直な男を誘惑して道心を試すという設定で大いに観客を楽しませるところである。

58.飛虎洞 飛虎洞の黒虎大王は観音の意を承け羅トを西天に、雷有声を普陀山に送る。

59.雙挑 羅トと雷有声の前に虎が現れてそれぞれを試す。観音の助けで危害を免れる。

60.試雷有声 良女が妙齡の乙女となり、僧形の雷有声の志操を試し普陀山に帰らせる。

(麗しい女性良女が雷有声の僧としての修練のほどを試す脚色が長い。この辺は目連救母とはかかわりのないもので、観客への娯楽提供とみられる。なお、僧が女人の誘惑に負けて破戒するというモチーフは月明和尚の破戒<? 和尚>というかたちで古くからおこなわれている。また朝鮮の仮面戯でも長老僧は数珠や袈裟を与えて破戒する。これらはいずれも根を同じくする演出であろう。)

61.単挑 羅トが母を思慕し、遺骨と経を天秤棒で担ってひとり西天に向かう。今回略。

62.観音試羅ト 観音が凡婦人となり、策を尽くして羅トの道心を試すが、羅ト不動。

(40分ほどの長い演戲。虎を出して威嚇したり、腹痛ゆえ、腹をさすってほしいとか、さまざまに僧を誘惑して試す。60と同工異曲。)

63.小挑 観音はさらに羅トを試すために白猿をして経文を奪わせ、雷音寺に至らせる。

64.見大仏 羅トは世尊に会い、大目鍵連の法名、錫杖を授かり、母超度の方法を聞く。

65.訴血湖 劉世真は三殿で血湖地獄行きのはずだが、十月懐胎の苦を訴え別殿に回付。

(? 田の目連戯三殿の場と較べると、あっさりしていて深刻な感じはない。)

66.打血湖地獄門 目連、三殿の門を開けるが、母は別殿にいったあと。再度地獄遍歴。

67.春白地獄 劉世真は春白地獄から火? 地獄へ。そのあとへ目連が尋ねていく。

68.火? 地獄 劉世真は火責めのあと甘露水で救われ別殿へ。そこへ目連が尋ねていく。

69.刀斫地獄 世真、刀で斬られたあと、甘露水で生き返り別殿へ。そこへ目連がいく。

70.鉄磨地獄 世真、鉄碓で苛まれ、糞尿の地獄へ。目連、失明の母に会うも再度離別。

(この辺り、演出も同工異曲、やや単調。もっとも傀儡戯だからこそ、釜ゆでの描写などができるとみられないこともない。人形の仕種とことばの妙味により地域の観衆にとっては相応に興味深いものなのかもしれない。物語の上では、肉食と傳家の七代の仏道を損なったことが主たる罪だが、劉世真の受苦の描写は地域社会の女性たちの身代わりとして意味があるのか。)

71.打森羅 五殿で閻君が世真を審判。目連は閻君に訴え母の責め苦を担うことにする。

72.代母繞枷 目連が母の代わりに拷問を受ける。そこへ鬼がきて罪は雪がれたという。

73.観音雪獄 玉旨を得た観音が世真に対し、孝子羅トの持斎徳行により罪を許すと。

(観音媽には厳格な面もある。鶏の盗みを悔いない奚在真には血湖地獄に行くことを命じる。また劉世真に対しては羅トの孝行があるからこそ軽くない罪を免除するという。つまり、世真その人の存在は依然として矮小なままである。この辺りの演出は時代の制約がある。さらに玉皇の位置が観音よりもはるかに高いことも宗教的には注目される。必ずしも仏教中心ではない。むしろ道教、民間信仰の要素が濃い^{*4}。とはいえ、この段の最後には観音が閻君に代わって、劉世真の枷を解き地獄から解かれるべきことを宣し、衆庶に向かって孝行を勧めている。この点を見ると実質的な中心は、やはり観音にあるといえる。)

74.全家昇天 傳相、劉世真、羅トの列仙。観音の力で罪が雪がれたことを感謝し昇天。

(相公爺 = 田公元帥の掃台は1分余りの簡単なもの^{*5}であった。)

戯神相公爺(蘇相公)による掃台を経て夜、10時35分終了。傀儡戯を中心にした七日間はあっという間であった。途中、冗長とおもわせる点もなくはなかったが、民俗世界の祭祀芸能としてはよくできているというべきである。なお、この目連戯では傳相のための中

*4 王靈官の玉旨伝達のことばの最後の部分に注目。「神明ト保庇伊五谷豊登、人口平安、四時有慶、八節無災、老安少懐。生理大発財、工廠添機台。農業無三災、批銀(僑匯)順調来。老者添福添寿、少者添丁進財。好事連捷来、大? 起相排、新年着再来。」(448頁)

*5 相公爺による儀礼の実相は、細井尚子「実験録『請神』・『辞神』」細井尚子・山本宏子編集『泉州目連傀儡にもとづく日中文化の諸相』、日本「目連傀儡」研究会、1997年、29-38頁に詳しい。

元供養、観音の役割の強調などがあり、仏教色が巧みに織り込まれている。同時に、傳相の仏道精進や目連救母とはかかわりのない庶民の生活像の提示もある。それらを勘案すると、観客を引きつけるための工夫に富むものといえるだろう。

備考

- 1.泉州では提綫木偶戲のことを「傀儡目連」または「嘉礼目連」とよぶ。また目連戲をする木偶戲班のことを「目連傀儡」「目連嘉礼」という^{*6}。
- 2.三殿訴血湖、五殿は明らかだが、他の殿は現れない。五殿前後に冥府の物語が集中する。また犬への変身がない^{*7}。
- 3.泉州目連戲にかかわる言説(凌翼雲『目連戲与仏教』による)
目連棚(舞台)を構えてこそ、「上傀儡師傅」の称が得られる(283頁)。
目連の結婚の話はなく、多くの動物が登場して、人形戲の特色を発揮する(284頁)。
- 4.目連戲のなかに観音が現れること。遅くとも元代。『録鬼簿続編』に「発慈悲観音度生、行孝道目連救母」とある。観音の出現する場は鄭之珍本にも多い^{*8}。
- 5.泉州の「目連救母」は主に観音の三つの節日(旧2月19日<誕生>、6月19日<観音得道、成仏>^{*9}、9月19日<出家記念日>)に演じる。また大?、城隍爺の誕生日にも必ず演じる^{*10}。目連戲を毎年演じれば、風朝雨順、合境平安が訪れる^{*11}。
- 6.各地域ごとに担当する班が固定していた。また傀儡師は上演の前夜、房事禁止、菜食^{*12}。
- 7.戯中の「做功德」の放赦において唱えられる「五更鼓」は道士が亡霊を弔う時のもので、その時の跳舞も道教儀礼に由来する^{*13}。

*6 柯子銘「泉州傀儡目連的独特性与考源浅近」『芸術論叢』5、福建省芸術研究所、1990年、95頁。

*7 同上、99頁。

*8 凌翼雲『目連戲与仏教』、広東高等教育出版社、1998年、163-164頁。

*9 かつては三年に一度この日に目連戲をしたという(前引、柯子銘「泉州傀儡目連的独特性与考源浅近」、101頁)。

*10 前引、凌翼雲『目連戲与仏教』、284頁。

*11 黄錫鈞「泉州傀儡『目連』概術」『芸術論叢4 福建南戲暨目連戲論文集』、福建省芸術研究所、1990年、153頁。また、天災や人災の際には臨時の目連戲をやった(153頁)。

*12 同上、153頁。

*13 前引、凌翼雲『目連戲与仏教』、284頁。

- 8.泉州木偶戲の人形は47種類であり、そのうち神怪が多い^{*14}。
- 9.初唐創建の泉州開元寺では和尚が目連戲をした。これを打城戲という。
- 10.これはまた、和尚戲、法事戲とよばれた。それは湖南出身の円明法師が1905年以降に3人の傀儡師をとくに寺に招いて「目連救母」をさせたことに端を發し、以降、隆盛したことによる^{*15}。
- 11.法事戲は俗講に由来するのではないかという説がある^{*16}。
- 12.「目連救母」は典型的な法事戲であり、そのことを示す重要な点は観音の演戲が舞台を圧倒することである^{*17}。泉州地域には至るところに観音亭、観音庵、観音宮がある^{*18}。
- 13.葬礼の時に目連戲をする例は各地にある。広東、福建でも目連戲のある段を演じたり、また道士が目連に扮して超度をおこなった。後者は「八門功德」(広東)、破獄(海南)、塔懺(福建)といった^{*19}。
- 14.烏飯は唐代の道士の養生の食べ物。目連戲に取り入れられてから広まる^{*20}。
- 15.泉州の目連戲では劉賈はあまり精細がない。人物としては雷有声(もと強盜)に特色がある。泉州の木偶戲ではこの種の人物を「紅猴」という。道化の一步手前、副淨相当^{*21}。
- 16.私見。中国・朝鮮・日本における目連伝承、目連戲への視点としては、

- 1)最も大きな枠としては「薦度亡靈のあそび」ということ。
- 2)印度由来の仏教説話から出て道教、巫俗と結びつき、演劇にまでいたったが、薦度、超度といった宗教性は最後まで維持された。
- 3)目連による「救母」の演劇は女性の救済の意味があった。
- 4)目連戲が南中国の盂蘭盆や葬礼における民俗として残ったのは、女性の救済が強く望まれた中国江南の地域事情を反映している。
- 5)朝鮮や日本の民間に演劇としての目連戲が広くおこなわれなかったのは宗族による女性への倫理的な締め付けがなかったことによるのだろう。朝鮮の士族のばあいは、

*14 同上、284頁。

*15 同上、284 - 285頁。

*16 沈継生「泉州法事戲与『目連救母』」、『芸術論叢』5、福建省芸術研究所、1990年、106頁。

*17 同上、110頁。

*18 前引、黄錫鈞「泉州傀儡『目連』概術」、149頁。

*19 前引、凌翼雲『目連戲与仏教』、285頁。

*20 同上、288頁。

*21 前引、黄錫鈞「泉州傀儡『目連』概術」、148頁。

一見、宗族支配と類似した門中組織が成立しているが、16世紀ごろ(朝鮮朝前半)まで、朱子学に基づく礼の強要は必ずしも浸透していなかった。

6)日本では、すでに、六回の中国現地調査を基にした研究報告書がある。すなわち、細井尚子・山本宏子編集『泉州目連傀儡にもとづく日中文化の諸相』、日本「目連傀儡」研究会、1997年である。そこでは、各種資料の呈示とともに、泉州傀儡戯の歴史、戯神相公爺論、瑜伽? 口という仏教儀礼との関係、日本の目連伝承、説経や能、盆踊りなどの芸能とのかかわり、木偶戯の音楽などについての幅広い研究がなされている。

7)これを踏まえると、今後の展望としては、中国各地の目連戯の実況を記述すること(各論)、朝鮮における目連伝承の受容と展開、日本の民俗宗教における目連伝承の展開、中国・朝鮮・日本における受容の異同とその文化史的な意味などが研究課題として浮上する。

8)韓国では、現在、この方面のまとまった研究書としては史在東編『孟蘭盆齋と目連伝承の文化史』、中央人文社、2000年があるだけである。大きな特徴として絵画や芸能分野への広がりがそれほどみられなかったことがあげられる。

9)朝鮮文化史のなかで、殺された母を蘇生させるというかたちの「救母」の主題は別の伝承「安楽国太子経」に結実している。それは説話、小説、絵画に痕跡を残している。そして、ここには母の罪悪はない。